

生まれたばかりのキリスト教会は、はじめからキリスト教と呼ばれたわけではなく、いろいろな呼ばれ方をされたようですが、その一つが「この道」「道」と呼ばれていたことがパウロの言葉の中に出てきます。

22章でパウロは自分のこれまでの歩みを振り返り、「わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ」た、と言っています。イエス・キリストを信じる者たちの群れを「この道」と呼んでいるのです。だれがそう呼び始めたのか、わかりません。どういう意味でこの言葉が使われていたのかも、わかりませんが、キリスト教が生まれた当初から「道」と呼ばれていたことは意義深いものがあります。

キリストご自身「わたしは道である」とおっしゃっておられるので、「この道」という呼び名は的外してはいない。

道というのは、辞書を引くと、たくさんの意味が出てきます。人や車などが行き来するところ、道のり、途中、歩み、教え、道理、専門、方面、たくさんある。

パウロ自身、自分がキリスト教のことをこの道と呼び、後に自分自身がキリスト者になった時、まさにキリスト教とは「道」だと思ったのではないか。イエス・キリストにおいて、神と人間との間に道が通じる。キリストという道が、まったくこれまで知らなかった新しい道が備えられて、その道を歩いていけば、救いへと至る、神の国の恵みの中に通じている、まことの道、ということを知らされていったのではないか。しかも、この道は自分一人で歩くのではない。キリストと共に歩む中で道であるような道なのです。キリストと共に歩いていくということは、キリストのみ言葉に聞いて、その御言葉に導かれ、キリストと向き合いながら歩いていく、ということで、振り返るとキリスト共に歩んできた道がそこにある、という道なのです。

パウロのカイサリアでの裁判が始まりました。ユダヤ教の側からは大祭司アナニアと長老たち数名と弁護士がやってきました。彼らは総督に向かってパウロの告発を始めます。その理由は、二つ。一つは、この男は疫病のような人間で世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている『ナザレ人の分派』の首謀者だということ。もう一つは、神殿を汚した、ということでした。世界中のユ

ダヤ人の中で騒動を引き起こしているというのは、もちろんひどく大げさな言い方ですが、こういう騒動を引き起こす男はローマ帝国にとって危険人物です、と訴えているのです。ナザレ人の分派という言い方は明らかに蔑称で、ナザレのどこの馬の骨ともわからん者のひねり出した異端だ、ということです。しかもユダヤ人にとって最も大切な神殿を汚したものだと言っているのです。

それに対して被告人となったパウロは弁明をします。自分は何も騒動は起こしていない。事実告発している人々は何の証拠も出していない。また分派呼ばわりされている「この道」にわたしは従い、ユダヤ人の先祖の神、聖書の神を信じ、神を礼拝しているものだ。つまりユダヤの人々と同じ神、同じ聖書を信じているのだ。そして正しいものも正しくないものも、やがて復活するという希望を神にたいして抱いている。もしわたしに不正があるというのなら、今ここで、はっきりと言うべきだ。わたしは、神にたいしても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めている。パウロはこう一気に弁明するのです。

総督フェリクスは「この道」についていろいろ聞かされて、かなり詳しく知っていました。だからこそ、不必要にユダヤ人の宗教上の問題に、立ち入る必要も感じていなかったし、する気もなかったでしょう。彼は両者の言い分を聞き、「千人隊長リシアが来るのを待ってお前たちの申し立てに対して判決を下すことにする」と言って裁判をとりあえず先延ばしにしました。

パウロは総督を前にして、またユダヤの大祭司たちを前にして、こういいました。「わたしは神に対しても人に対しても責められるところのない良心を絶えず保つように努めています。」パウロはここで良心という言葉を持ち出しているのですが、ここで語られている良心とは、わたしたちがいま日本語として使っている良心という言葉とはずいぶん違う言葉です。わたしたちが今ふつうに使う良心とは「自分の行いに対して善悪を判断する心」というような意味で、良心に恥じない生活をする、というふうに使います。日本では良心というものはとても尊ばれる気風が一方であります。良心的、という言葉はとても日本人の好きな言葉の一つでしょう。さらに深く言えば、自分の中にもう一人の自分がいて、自分を見ている、そのもうひとりの自分が良心だ、というような言い方もします。しかしパウロが言う良心とはもう一人の自分などではない。もともと良心と訳されたギリシア語は共に知る者という意味の言葉です。共に知る者とは、もう一人の自分ではなく、神さまのことです。キリストのことです。このわたしのことを共に知る者としていてくださる。つまりここでパウロ

が言う責められることのない良心を保つということは、どこまでも神の前で、自分のことを知っていてくださる神の前で、神にたいして生きること。わたしがどんな罪人で、どんな悪を抱えており、どんな驕りの中で生きているか本当に知ってくださっているキリストと共に生きること、それが良心を絶えず保つということなのです。つまりどういう状況に置かれても、自分は一人で生きているのではなくて、神の前であって、神と共に、神に向かって生きている、そのことを受けとめていきること、それがここでパウロが言う良心を保つということでした。

今ここで、裁判の中で、自分がどうなるのかわからないような現実の中で、神の前で神と共に生きる。

パウロは、以前はともかく、イエス・キリストに出会ってからは自分の中にもう一人自分がいて、その良心というもう一人の自分に恥じない生活をする、というようなことでは人間の罪の問題は解決しない、ということを骨の髄から知らされてきたのです。例えばよきサマリア人のたとえで、傷ついた旅人の横を見て見ぬふりをして通り過ぎた人たちがいました。祭司とレビ人です。あの人は良心がなかったのでしょうか。良心のかけらもない極悪人だったのでしょうか。そうではないでしょう。人間の中のこの人になんか関わりたくない、という我は平気で私たちの良心を乗り越えていく。もちろんよきサマリア人のように良心的な行いをすることもあります。それはとても大事なことです。しかし、人間の良心というものはそもそもが不安定なもので、そのときどきに揺らぐのです。良心という名のもう一人の自分など、本当はいないのではないか。あるのはただ自分の心です。パウロは自分のことを語って、わたしの内には善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意志（つまり良心）はありますが、それが実行できないのです、というのです。

総督フェリクスは妻ドルシラともどもパウロたびたび呼び出し、信仰の話を聞いたのです。パウロは総督の前で「正しいものも正しくないものもやがて復活するという希望を抱いている」と言いました。それは正しいものも正しくないものも、とも神の裁きの前に立つためです。フェリクスはそのことに深い関心を寄せたのではないか。自分も、そして妻のドルシラも人として様々な罪を犯してきた。そのことに良心の呵責を覚えてきたのかもしれませんが。

しかしパウロを呼びつけ、話を聞いて、フェリクスもドルシラも恐ろしくなってきた。神の前に立つことは恐ろしいことだと思った。一方パウロは復活して神の御前に立つことは希望だ、と語った。それはパウロが神の裁きの前に立っても、自分は立派な人間でよいことばかりしてきた、と思っているからでは

ありません。まったく違う。むしろ彼は先ほど申し上げたように、善をなそうとする意志はありますが、それが実行できないのです、と赤裸々に語る人だった。それでもなお、パウロがやがて来る復活は希望だ、と言えたのは、彼が神の前で神と共に、生きてきたからです。イエス・キリストの言葉に聞いてきた。イエス・キリストのまなざしを受け続けてきた。それは一人の罪人の罪の赦しのために十字架にかかり、わたしに代わってその罪の罰としての死を死んでくださり、わたしに新しいいのちを与えてくださるキリストの言葉、恵み、まなざしです。復活して神の前で裁きを受けるとき、どのような裁きになるとしても、わたしたちは神の愛の中にある、ということを感じてパウロは活かされているのです。

フェリクスもドルシラも良心の呵責だけなら、神の前に立つことは恐ろしいことです。神の前で、神と共に神に向かって生きる歩みをはじめて人は自分の良心ではなく、神と共にある希望の中で生きていける。

わたしたちの生きる人生は、一人だとぼとぼとどこに辿りつくかわからない熊笹の中をかき分けて進んでいくような歩みではありません。キリストと共にずっと歩いていく、歩いていける。神の前で、神と共に、キリストと共に歩いていく。それは来るべき裁きも恐ろしいものとしてではなく、キリストのまなざしの中で、希望を抱いて、受けとめていける、そういう歩みになっていくのです。